慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	源氏物語の入内断念 : 匂宮三帖を中心に
Sub Title	Abandonment of entering the rear palace in The tale of Genji : with a focus on 'Nioumiya', 'Koubai', and 'Takekawa'
Author	栗本, 賀世子(Kurimoto, Kayoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.117, (2019. 12) ,p.65- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤道生教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01170001-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

源氏物語の入内断念

―匂宮三帖を中心に―

栗本　賀世子

一、はじめに

平安時代の貴族達は、娘を天皇の後宮に入れ、生まれた皇子を次の天皇として即位させその後見役となることで、政権を獲得していた。それ故、上級貴族の家では、姫君たちは生まれた時から将来の皇妃となることを期待され、大事に養育されたのであった。しかしながら、これらの姫君たちの全てが入内を果たせたわけではない。史上にはさまざまな事情で入内を断念した姫君たちが存在し、そうした実態の影響を受けて虚構の物語にも入内断念が描かれる。入内断念のパターンとしては、大きく分けて①実家の没落による断念[1]②天皇・東宮との年齢の不釣合による断念[2]③有力な皇妃への憚りによる断念[3]④男との私通による断念[4]の四つが挙げられる。この中で、本稿では、③に特に焦点を当てたい。『源氏物語』では、このパターンの入内断念は、続編の初めに集中して見られる。

続編世界の始まり、匂宮三帖と呼ばれる巻々は、光源氏を亡くした後の暗い雰囲気に包まれている。その内の紅梅・竹河巻に入内断念が繰り返し描かれるのだが、このことは物語においてはたしてどのような意味を持つのだろうか。続編におけ

る後宮情勢を光源氏生前のそれと比較しつつ、考察を加えていきたい。

二、光源氏と夕霧の後宮政策の差異

歴史学の分野では、摂関政治が進展する中、母后と外戚の藤原摂関家の主導によって天皇の配侍者が選別されるようになったことが指摘されている。[5] 天皇の後宮は、権勢を振るう外戚の特定の一族（藤原師輔を中心とした一定の家系）出身の女性によって占められ、他家の女性はしばしば排除されて、皇妃の数も減少したのである。こうした事情が背景にあったが故に、史上で有力な皇妃――多くは天皇の外戚の一族の娘である――に憚り、他家の貴族の娘の入内が早い段階から断念される事例が頻繁に生じたと捉えることができよう。

さて、『源氏物語』では、今上帝の御代、光源氏の没後に、後継者の夕霧の栄えとそれに対する他家の憚りが繰り返し描かれているのが目を引く。夕霧家では、夕霧妹の明石中宮は、今上帝の中宮、東宮の母として並びない地位にあったが、それに加えて、夕霧の大君も東宮に入内しており、寵愛されていた。

大殿（おほいどの）（＝夕霧）の御むすめは、いとあまたものしたまふ。大姫君は春宮に参りたまひて、またきしろふ人なきさまにてさぶらひたまふ。その次々、なほみなついでのままにこそはと世の人も思ひきこえ、后の宮（＝明石中宮）ものたまはすれど、この兵部卿宮（＝匂宮）はさしも思したらず、わが御心より起こらざらむことなどは、すさまじく思しぬべき御気色なめり。

（⑤匂宮・一九頁）

右の箇所では、波線部にあるように、東宮に引き続いて明石中宮腹の皇子たちが「なほみなついでのままに」夕霧の娘と結婚するだろうと世間の人が予測し、明石中宮もそのことを望んだという記述に注目したい。[6] 恐らく、夕霧の大君の東宮への入内の際も、明石中宮の強い支持があったにちがいない。東宮の母后と外戚の主導によって東宮妃選びが行われていることが看取される箇所である。なお、本来ならば帝の母后や外戚が力を持つはずであったが、今上母后の承香殿女御は息子の即位以前に亡くなっており、外戚の髭黒家は当主髭黒を失い弱体化していたため、続編では東宮（次代の帝）の母后と外戚

が今上帝を支え、後宮を管理していたのであろう。(7)

それに対して、夕霧家以外の一族の後宮政策については、次のように記されていた。

①例の、かくかしづきたまふ聞こえありて、（紅梅大納言ノ娘ニ）次々に従ひつつ聞こえたまふ人多く、内裏（＝今上帝）、春宮（＝明石中宮腹第一皇子）より御気色あれど、内裏には中宮（＝明石中宮）おはします、いかばかりの人かはかの御けはひに並びきこえむ、さりとて、思ひ劣り卑下せんもかひなかるべし、春宮には、右大臣殿の（＝夕霧ノ大君）並ぶ人なげにてさぶらひたまへばきしろひにくけれど、さのみ言ひてやは、人にまさらむと思ふ女子を宮仕に思ひ絶えては、何の本意かはあらむ、と思したちて、（大君ハ春宮ニ）参らせたてまつりたまふ。（⑤紅梅・四一頁）

②内裏（＝今上帝）にも、かならず宮仕の本意深きよしを大臣（＝髭黒）の奏しおきたまひければ、おとなびたまひぬらむ年月を推しはからせたまひて仰せ言絶えずあれど、中宮（＝明石中宮）のいよいよ並びなくのみなりまさりたまふ御けはひにおされて、皆人無徳にものしたまふめる末に参りて、遙かに目をそばめられたてまつらむもわづらはしく、また人に劣り数ならぬさまにて見む、はた、心づくしなるべきを思ほしたゆたふ。（⑤竹河・六一頁）

③この君たち（＝玉鬘ノ息子達）ぞ、「（冷泉院ヘノ参院ハ）なほもののはえなき心地こそすべけれ。……春宮はいかが」など申したまへば、（玉鬘）「いさや、はじめよりやむごとなき人（＝夕霧ノ大君）の、かたはらもなきやうにてのみものしたまふめればこそ。なかなかにてまじらはむは、胸いたく人笑へなることもやあらむとつつましければ……」（⑤竹河・七八頁）

物語正編では、源氏の一族に次いで権勢を誇っていた二つの一族、致仕大臣家（旧左大臣家）と髭黒家であるが、致仕大臣家は嫡男の柏木を、髭黒家は当主の髭黒を亡くすという不幸もあり、続編では、源氏の後継者、夕霧に圧倒されてしまう。

柏木の代わりに致仕大臣家を継いだ弟の紅梅大納言は、その官位は常に夕霧に劣っており、後宮政策でも後れを取っていた。①によれば、紅梅は娘を入内させることを望んでいたが、今上帝には明石中宮が、東宮には夕霧の大君が仕えており、

それぞれ寵愛を独占していたため、二の足を踏むことになる（太線部）。最終的には「人にまさらむと思ふ女子を宮仕に思ひ絶えては、何の本意かはあらむ」（傍線部）と考え、「故大臣（＝致仕大臣）の、院の女御（＝弘徽殿女御）の御事を胸いたく思してやみにし慰めのこともあらなむ」（⑤紅梅・四二頁）――冷泉朝で弘徽殿女御を立后させることのできなかった父致仕大臣の無念を晴らそうと、かろうじて大君を東宮に入内させたのであるが、中の君の方の入内は断念するのである。ここで、今上帝よりも東宮が入内先として選ばれたのは、既に立后も果たし、東宮を始め四皇子一皇女を儲けている明石中宮ではなく、一東宮妃に過ぎず、子を生んでいない夕霧大君にならばまだ勝てる見込みがあると考えられたからであろう。

髭黒家の場合は、致仕大臣家よりも状況は悪かった。この一族は、そもそもは、髭黒の姉妹が今上帝の母という関係から、当代の外戚として世を治めるはずであった。しかし、大黒柱の髭黒が子供たちがまだ官位も低い内に亡くなったため、その後はまたたく間に勢力を失ったのであった。未亡人となった玉鬘は、年頃になった娘たちの処遇に苦悩する。髭黒の「限りなきにても、ただ人にはかけてあるまじきもの」（⑤竹河・八七頁）との遺志に従いたいものの、やはり明石中宮と夕霧大君が憚られる。②③では、「中宮のいよいよ並びなくのみなりまさりたまふ御けはひにおされて、皆人無徳にものしたまふめる」、「（夕霧ノ大君ノ）かたはらもなきやうにてのみものしたまふめれば」（太線部）という両者の圧倒的な威勢に恐れをなし、後見の弱い我が娘が入内しても気苦労が絶えぬ事であろうと、入内を断念するのであった。結果として、既に譲位していることで「盛り過ぎたる心地すれど」（⑤竹河・六六頁）、「なほもののはえなき心地こそすべけれ」（同・七八頁）と残念な描かれ方が為される冷泉院が大君の結婚相手として選ばれた。その下の中の君については、当初臣下の男性との結婚が検討されていたが、大君を冷泉院に参院させたことで、入内を望んでいた今上帝の不興を買うことになってしまったため、玉鬘は彼女を尚侍として大君の代わりに入内させることにする。とはいえ、この場合は、他の皇妃との軋轢を避けるために、半皇妃的存在の女官として「公ざま」（⑤竹河・一〇一頁）の宮仕えをさせたに過ぎず、正規の皇妃としての入内は断念されているといえよう。

以上のように、続編始めの匂宮三帖では、夕霧家の女性が天皇・東宮の後宮で時めいており、他家の女性は夕霧家を憚っ

て入内を遠慮しているという状況が明らかにされていた。後宮から夕霧家以外の他家は排除されているような印象を読者に与え、続編における夕霧家のこの上ない権勢が示される。かくのごとき夕霧家の描かれ方は、先述した史上の藤原摂関家の有り様を髣髴させるものである。

一方で、続編以前、正編で、冷泉朝の執政、今上帝の舅として権力を握っていた夕霧の父の光源氏の後宮政策はどのようなものであっただろうか。冷泉後宮には、源氏は養女の秋好中宮（斎宮女御）を入内させているが、他にも弘徽殿女御（内大臣女）、王女御（式部卿宮女）、左大殿の女御、更衣二人（中納言女、宰相女）が他家から入っている。

（後宮ニハ）中宮（＝秋好中宮）、弘徽殿女御、この宮の女御（＝王女御）、左の大殿の女御などさぶらひたまふ。さては中納言、宰相の御むすめ二人ばかりぞさぶらひたまひける。（③真木柱・三八一～三八二頁）

この中で、王女御の入内についてだけは、源氏は好意的ではなく、兵部卿宮（式部卿宮）も入内をためらっていた。

兵部卿宮の中の君もさやうに心ざしてかしづきたまふ名高きを、大臣（おとど）（＝源氏）は、人よりまさりたまへとしも思さずなむありける。（②澪標・三〇一～三〇二頁）

入道の宮（＝藤壺女院）、兵部卿宮の、姫君をいつしかとかしづき騒ぎたまふめるを、大臣（おとど）の隙（ひま）ある仲にて、いかがもてなしたまはむと心苦しく思す。（同・三二一頁）

かく隙間なくて二ところ（＝斎宮女御・弘徽殿女御）さぶらひたまへば、兵部卿宮、すがすがとも（入内ヲ）え思ほし立たず、帝おとなびたまひなば、さりともえ思ほし棄てじとぞ、待ち過ぐしたまふ。（②絵合・三七五頁）

この入内阻止について、冷泉帝の外戚である兵部卿宮の力を抑えようという源氏の政治的意図を読取ろうとする説がある。[8] しかしながら、物語としては、入内阻止の理由として、源氏の私怨以上のことを語っていないことに注意したい。

兵部卿の親王（みこ）、年ごろの御心ばへのつらく思はずにて、ただ世の聞こえをのみ思し憚りたまひしことを大臣（おとど）（＝源氏）はうきものに思しおきて、昔のやうにも睦びきこえたまはず。なべての世にはあまねくめでたき御心なれど、この御あたりは、なかなか情なきふしもうちまぜたまふを……（②澪標・三〇一頁）

右の箇所では、源氏の須磨流謫期に、都に残った紫の上が父兵部卿宮に冷淡にされていたことを、源氏が「うきもの」と恨んでおり、それ故に帰京してからは源氏が兵部卿宮家と距離を置いたことが述べられる。また、兵部卿宮（式部卿宮）自身も、かつての源氏方に対する仕打ちを後悔し、源氏の態度に理解を示しているのである。

……（源氏ハ）年ごろ世の中にはあまねき御心なれど、このわたり（＝式部卿宮家）をばあやにくに情なく、事にふれてはしたなめ、宮人をも御用意なく、愁はしきことのみ多かるに、つらしと思ひおきたまふことこそはありけめ、といとほしくもからくも思しけるを……

（③少女・七七頁）

宮は、「つらしと思ひおきたまふことこそはありけめ」と、原因が以前の自分の薄情な態度にあったことを認識し、全ては我が身から出た錆であるのだから仕方がないとあきらめており、ここには、源氏を深く恨んでいる様子は見えない。もし源氏が宮家を牽制するという策謀のために入内を阻止していたのだとしたら、宮のこのような反応は、あまりにもお人好しが過ぎるのではないか。

この物語は、紫の上に関する話を、基本的には継子いじめ譚の枠組みに沿って描いている。[9] 継子いじめ譚では、継母が子をいじめるが、最終的に子は後に高い地位に上り、継母と継母に同調した父親は子によって復讐されることが多い。紫の上の場合は、当初意地悪な継母の所に引き取られそうになったのだが、間一髪で源氏に救い出されていた。この継母は、後々まで紫の上のことを憎み続け、源氏が須磨に退去する折には紫の上の不幸を喜んだ。ところが、兵部卿宮は、妻のこのような態度をたしなめるどころか、世間体を気にして紫の上・源氏との関係を断っていたのであった。こうした継子いじめ譚の流れからすると、源氏帰京以降の式部卿宮家への源氏の冷遇も、あくまでも女君を憎む継母とそれに同調して女君によそよそしく接した父への復讐という形で語られるのではないだろうか。そこに源氏の政治的意図まで読む必要はないというのが、稿者の考えである。ただし、源氏の反対で王女御がなかなか入内を認められなかったことが、結果として、立后争いでの秋好中宮の勝利、帝の外戚式部卿宮家の伸長阻止を導いたことは間違いない。登場人物の源氏の意図とは無関係に、物語がそうした展開を狙い、継子譚という話型を利用して王女御の入内遅延を描いたと見るべきであろう。

ともかく、最終的に王女御は後宮入りを果たした。続編と異なり、複数の家からバランス良く皇妃が輩出されている冷泉朝の後宮の状況には、源氏が内大臣家（旧左大臣家）を始めとする諸家と協調して政権を運営していたことが関係するのであろうが、その他にも、源氏本人に、後宮に関するある理念があったことを指摘できる。[11] 源氏は、既に養女秋好中宮を入内させていたが、にもかかわらず、それ以外の女性の冷泉帝への宮仕えも望んでいる彼の発言が、度々物語中に見えるのである。[10]

「……宮仕はさるべき筋にて、上も下も思ひおよび出で立つこそ、心高きことなれ。公ざまにて、さる所の事をつかさどり、政のおもむきを認め知らむことは、はかばかしからずあはつけきやうにおぼえたれど、などかまたさしもあらむ。ただわが身のありさまからこそよろづのことはべめれ……」

（③行幸・三〇一頁）

右は、源氏が養女玉鬘を尚侍として入内させることを玉鬘祖母の大宮に相談する場面での発言である。源氏は、身分の上下に関わらず誰もが帝寵を期待して娘を宮仕えに出すのが理想的である、尚侍のような「公ざま」の女官職は、正規の皇妃に比べて劣るように思われるけれども、本人の在り様次第で時めくことも可能である、と述べるのである。玉鬘の入内は、玉鬘をいつまでも手元に留めておきたいという源氏の下心による判断であったのだけれども、一方で、ここに見られる考え方が、大宮を説得するための全くの嘘だったというわけでもなかろう。若菜上巻には、次のような源氏の発言も見える。

「……ただ内裏にこそ奉りたまはめ。やむごとなきまづの人々おはすといふことは、よしなきことなり。それにさはるべきことにもあらず。かならず、さりとて、末の人おろかなるやうもなし……」

（④若菜上・四一頁）

兄朱雀院が、鍾愛の皇女女三の宮との結婚を源氏に打診してきた際は、秋好中宮ら古参の皇妃など気にせず帝に差し上げれば良い、入内の順序が遅いからと言って寵愛を受けないとは限らないのだから、と入内を勧めている。

さらに、源氏は、娘明石の姫君（明石中宮）の東宮（今上帝）への入内の際には、他家に対して、以下のような寛大な態度を見せている。

（東宮ハ）いとおとなしくおはしませば、人の、むすめども競ひ参らすべきことを心ざし思すなれど、この殿（＝源

氏）の思しきざすさまのいとことなれば、なかなかにてやまじらはんと、左大臣（ひだりのおとど）なども思しとどまるなるを（源氏ハ）聞こしめして、「いとたいだいしきことなり。宮仕の筋は、あまたある中に、すこしのけぢめをいどまむこそ本意ならめ。そこらの警策（きやうさく）の姫君たち引き籠められなば、世に栄（はえ）あらじ」とのたまひて、（明石ノ姫君ノ）御参り延びぬ。次々にもとしづめたまひけるを、かかるよし所どころに聞きたまひて、左大臣殿の三の君参りたまひぬ。

（③梅枝・四一四頁）

貴族たちが源氏に憚って娘を入内させることを遠慮しているとの噂が耳に入ると、源氏は何と明石の姫君の入内を延期してしまうのであった。源氏の持論として、大勢の皇妃が仕え寵愛の優劣を競うのこそ理想的である、という考えがあり、優れた姫君たちが入内を断念して後宮が寂しい有様になることを憂慮した源氏は、我が娘の入内をしばらく控えることで、他家の娘の入内を推奨したのである。この結果、左大臣の三の君が東宮に最初に入内することになったのだという。

見てきたように、帝の寵愛を期待して多くの姫君が入内し、妍を競い合う、それこそが後宮のあるべき姿であるという理念を源氏は抱いており、冷泉朝を聖代とすべく、華やかな後宮を実現するために、基本的には自家以外の皇妃の入内をむしろ望んでいたのである。そのような源氏の姿は、史上の自家の栄達のみを望む摂関たちとは一線を画する。現実にはありえない、己よりも公的な利益を追求する公明正大な政治家として主人公源氏は描かれているのであり、他家と協調する様子もなく、一族の勢力拡張を企み婚姻政策を進める続編の夕霧との差は明らかなのであった。

ところで、続編の始発に位置する匂宮三帖は、正編の後日譚とも言われ、そこでは、亡き源氏の卓越性が賛美され、源氏の生きた時代が黄金期としてひたすら懐古されていた。(12)

A光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。遜位（おりゐ）の帝（＝冷泉院）をかけたてまつらんはかたじけなし、当代の三の宮（＝匂宮）、その同じ殿（おとど）にて生ひ出でたまひし宮の若君（＝薫）と、この二（ふた）ところなんとりどりにきよらなる御名とりたまひて、げにいとなべてならぬ御ありさまどもなれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。

（⑤匂宮・一七頁）

B天の下の人、院（＝源氏）を恋ひきこえぬなく、とにかくにつけても、世はただ火を消ちたるやうに、何ごともはえなき嘆きをせぬをりなかりけり。まして殿（＝六条院）の内の人々、御方々、宮たちなどはさらにも聞こえず、限りなき御事をばさるものにて、またかの紫（＝紫ノ上）の御ありさまを心にしめつつ、よろづのことにつけて、思ひ出できこえたまはぬ時の間なし。（同・二一一頁）

C（紅梅大納言）「あはれ、光る源氏といはゆる御盛りの大将などにおはせしころ、（私ハ）童にてかやうにてまじらひ馴れきこえしこそ、世とともに恋しうはべれ。この宮たち（＝匂宮・薫）を世人もいとことに思ひきこえ、げに人にめでられんとなりたまへる御ありさまなれど、端が端にもおぼえたまはぬは、なほたぐひあらじと（源氏ヲ）思ひきこえし心のなしにやありけん……」（⑤紅梅・四八頁）

D（冷泉院）「故六条院（＝源氏）の、踏歌の朝に女方にて遊びせられける、いとおもしろかりきと、右大臣（＝夕霧）の語られし。何ごともかのわたりのさしつぎなるべき人難くなりにける世なりや。いと物の上手なる女さへ多く集まりて、いかにはかなきこともをかしかりけん」（⑤竹河・九九頁）

Aでは、源氏亡き世が「光隠れたまひにし後」とされ、源氏の主人公性を受け継ぐ人物として、薫と匂宮が最有力候補に挙げられるが、それとて「いとまばゆき際にはおはせざるべし」、源氏のまばゆい美しさには劣るのだという。Bでは、世の人が皆源氏を追慕しているが、源氏を失った世界が「ただ火を消ちたるやうに」寂しい様であること、何事も映えない世になってしまったことが語られる。Cは、源氏の生前を恋しく思う紅梅大納言の言葉だが、世評の高い薫や匂宮といえども、「端が端にもおぼえたまはぬ」、源氏とは全く比較にならないのだ、と源氏の美質を絶対視するのである。Dは、冷泉院が昔源氏が催したという六条院の女楽のことを薫に語っている場面であるが、「何ごともかのわたりのさしつぎなるべき人難くなりにける世なりや」と、源氏のように興ある行事を催せる人は今の世にいないと残念がっている。

このように源氏不在が嘆かれる中で、致仕大臣家・髭黒家の入内断念が記されることの意義は大きい。すなわち、夕霧家以外の家の入内断念を繰り返し描くことで、他家に手を差し伸べ姫君を入内させることを推奨した、源氏のような理想的な

政治家が、続編世界にはもはや存在しないことを、物語が示唆しているように思われるのである。

ここで、Aを再度検討してみたい。続編で源氏を継ぐべき理想的人物として、冷泉院、薫、匂宮の名が挙がるが、源氏の秘密の子である冷泉院は恐れ多いという理由で除外され、結果的に源氏の子とされる薫と孫の匂宮が次代の主人公候補として印象付けられる。しかし、なぜ、ここに冷泉院と同じく源氏の息子である夕霧が挙げられなかったのであろうか。正編では、冷泉院も、夕霧も、共に源氏と瓜二つの美貌を持つ者として描かれていたはずなのである。その理由としては、続編の夕霧が、恋愛人のみならず政治家という面でも、源氏の理想性を受け継ぐ人物ではなかったことが考えられるのではないか。続編において、夕霧はしょせん、利己的な史上の藤原摂関家の権力者と同程度にしか語られない存在であり、源氏のような、朝廷を第一に考え、さらに他家への配慮も忘れない政治家とは、かなりの隔たりがあったのである。宇治十帖に至っては、匂宮を娘の六の君の婿に迎えた後、匂宮の心を捉える宇治中の君のことを快く思わず、思いやりなく匂宮・中の君の仲を邪魔する悪役的存在にまで成り下がってしまうのであった。[13]

三、入内断念後の婿選び

前節では、致仕大臣家・髭黒家の夕霧家への憚りによる入内断念という出来事が、理想的な主人公源氏の不在を浮き彫りにし、源氏生前の世を懐古する文脈に収斂していくことを指摘したのであるが、実は入内断念後の展開についても同様のことが指摘できる。最後に、そのことについて触れておきたい。入内の代替策として、致仕大臣家と髭黒家は、帝・東宮以外の男性の中から婿を探すことになる。まずは致仕大臣家から見ていこう。

Ⅰ中の君も、うちすがひて、あてになまめかしう、澄みたるさまはまさりて、をかしうおはすめれば、（紅梅大納言ハ）ただ人にてはあたらしく見せまうき御さまを、兵部卿宮（＝匂宮）のさも思したらばなど思したる。

（⑤紅梅・四一～四二頁）

Ⅱ「人におとらむ宮仕よりは、この宮（＝匂宮）にこそはよろしからむ女子は見せたてまつらまほしけれ。心のゆくにま

かせて、かしづきて見たてまつらんに命延びぬべき宮の御さまなり」と（紅梅大納言ハ）のたまひながら……

（同・四二頁）

Ⅲ（紅梅大納言）「いかがはせん。昔の恋しき御形見にはこの宮ばかりこそは。仏の隠れたまひけむ御なごりには、阿難が光放ちけんを、二たび出でたまへるかと疑ふさかしき聖のありけるを。闇にまどふはるけ所に、聞こえをかさむかし」

（同・四八～四九頁）

紅梅大納言が中の君の婿候補として目を付けたのは、匂宮である。Ⅰで、紅梅大納言が「ただ人にてはあたらしく見せまうき御さま」の中の君を匂宮と結婚させたがっていることからすると、今上帝の后腹の高貴な親王で「ただ人」とは異なるその身分こそが婿候補として筆頭に挙げられている理由のように思われる。史上でも、天皇・東宮以外では、藤原摂関家の子息と共に后腹の親王が上級貴族の姫君の結婚相手として特に望まれる傾向にあったから、この縁談は平安時代の実態に沿ったものといえよう。[14] しかし、后腹の親王ならば、東宮のすぐ下の弟で、「次の坊がね」（匂宮・一八頁）とされる二の宮の方がより婿として望ましかったのではないか。[15] 二の宮は既に夕霧の婿になっているので、紅梅大納言が夕霧家との衝突を避けたとも考えられるのであるが、それにしても、紅梅巻では二の宮の名は全く挙がらず、婿候補として検討されている気配は微塵もない。紅梅大納言の本命は最初から匂宮ただ一人であったかのように語られるのである。

そこで他の箇所を見てみると、紅梅大納言は、Ⅱ二重傍線部では「命延びぬべき宮の御さまなり」と宮本人の魅力に惹かれていることを述べており、さらに、前節で挙げたCの直後に位置するⅢの二重傍線部では、仏亡き世に光を放ったとされるその弟子の阿難を引き合いに出し、源氏死後の光なき世界では、源氏には劣るものの、「昔の恋しき御形見」といえるのは匂宮しかいないと考え、その後に結婚を打診する和歌を匂宮に送っていた。つまり、匂宮の后腹の親王という身分に加え、正編の主人公であった源氏にはかなわないながらも、源氏に通じるような美質を持っていたことが、婿に願った理由であったことが、これらの記述から明らかになるのであった。何よりも、Ⅱ二重傍線部前半の「人におとらむ宮仕よりは、この宮にこそはよろしからむ女子は見せたてまつらまほしけれ」――寵愛を得ることができず他の皇妃に劣るような宮仕えに

なるくらいなら、入内させずに匂宮にこそ娘は任せたい、という記述が、たとえ皇位を継承することがなかろうとも、一人の人間として魅力を持つ匂宮という男に娘を添わせたい、という紅梅大納言の思いを、雄弁に物語っているのではないだろうか。

一方の髭黒家では、大君は冷泉院への参院が決定したが、ここでは、中の君の方の婿選びに焦点を当てたい。

Ⅳ右の大殿（＝夕霧）の蔵人少将とかいひしは、三条殿（＝雲居ノ雁）の御腹にて、兄君たちよりもひき越しいみじうかしづきたまひ、人柄もいとをかしかりし君、いとねむごろに申したまふ。……女房にもけ近く馴れ寄りつつ、思ふことを語らふにもたよりありて、夜昼、あたり去らぬ耳かしがましさを、うるさきものの心苦しきに、尚侍（かむ）の殿（＝玉鬘）も思したり。母北の方（＝雲居ノ雁）の御文もしばしば奉りたまひて、「いと軽びたるほどにはべるめれど、思しゆるす方もや」となむ大臣（おとど）（＝夕霧）も聞こえたまひける。（玉鬘ハ）姫君（＝大君）をば、さらにただのさまにも思しおきてたまはず、中の君をなむ、いますこし世の聞こえ軽々しからぬほどになずらひならば、さもやと思しける。

（⑤竹河・六二～六三頁）

Ⅴ（大君参院ノ際、玉鬘ハ）この御参り過ぐして中の君を（蔵人少将ニ）と思すなるべし。（大君・中ノ君ヲ一度ニ）さしあはせてはうたてしたり顔ならむ、まだ位なども浅へたるほどを、など思すに……

（同・八三頁）

Ⅵ大臣（＝夕霧）、北の方（＝雲居ノ雁）の思すところにより、せめて人（＝蔵人少将）の御恨み深くはと、とりかへありて思すこの（大君ノ冷泉院ヘノ）御参りを、（蔵人少将ガ）妨げやうに思ふらんはしもめざましきこと、（大君ハ）限りなきにても、ただ人にはかけてあるまじきものに故殿（＝髭黒）の思しおきてたりしものを、院に参りたまはむだに、行く末のはえばえしからぬを……

（同・八七頁）

Ⅶ「おほやけの数まへたまふよろこびなどは、何ともおぼえはべらず、私の思ふことかなはぬ嘆きのみ、年月にそへて思ひたまへはるけん方なきこと」と（宰相中将（蔵人少将）ハ）涙おし拭（のご）ふもことさらめいたり。二十七八のほどの、いと盛りににほひ、はなやかなる容貌（かたち）したまへり。「見苦し」の君たちの、世の中を心のままにおごりて、官位をば何とも

思はず過ぐしいますがらふや。故殿（＝髭黒）おはせましかば、ここなる人々も、かかるすさびごとにぞ、心は乱らまし」と（玉鬘ハ）うち泣きたまふ。

（同・一一二～一一三頁）

玉鬘が中の君の婿にと考えたのは、夕霧家の雲居の雁腹の子息、蔵人少将であった。蔵人少将は大君に熱心に求婚し、夕霧と雲居の雁も後押しして玉鬘に働きかけていた。が、故髭黒が入内を期待していた大君には臣下との結婚をさせたいとは思わない玉鬘は、代わりに中の君をと思い、大君をまず参院させた後、少将が今少し昇進したら結婚を許そうと考えていたのであった（Ⅳ Ⅴ傍線部）。史上では、有力な皇妃への憚りから入内を断念した貴族たちは、天皇家外戚の摂関家の子息との縁組を代わりに望むようになっていたから[16]、それと同じく、玉鬘も東宮外戚夕霧家と結びつこうとした、と見なすことはできる。

だが、その一方で、玉鬘の蔵人少将に対する否定的評価が度々語られていたことは見逃せない。玉鬘は、我が邸の女房に大君への仲介を頼んで「夜昼、あたり去らぬ」蔵人少将のしつこさについては、「うるさき」と思い（Ⅳ波線部）、大君参院決定後もあきらめきれず思いつめているその様子については、せっかく中の君との結婚を許してやろうというのに、大君の参院を妨げようというのは、「めざましきこと」であると突き放していた（Ⅵ波線部）。結局、大君が参院してから蔵人少将が玉鬘邸に寄りつかなくなったこともあって、中の君と少将の結婚は破談となり、中の君は尚侍として宮仕えすることになった。その後、宰相中将に昇進した蔵人少将が、玉鬘邸を訪れた際、大君への未練は尽きず、昇進しても嬉しいとも思わないのだ、と語ったことに対し、そこでも玉鬘は、官位を軽んじて色恋沙汰に身を入れる姿を「見苦し」と評していたのであった（Ⅶ波線部）。

こうした玉鬘が蔵人少将をそれほど好ましく思わないような記述からすると、婿候補の本命は蔵人少将ではなかったのではないか、という疑問が生じてくる。玉鬘は、実のところは、義理の弟で玉鬘邸によく出入りしていた薫を中の君の婿としたかったのではなかろうか[17]。竹河巻で玉鬘が薫を評価している箇所を拾ってみよう。

Ⅷ六条院（＝源氏）の御末に、朱雀院（しゅじゃくゐん）の宮（＝女三ノ宮）の御腹に生（む）まれたまへりし君、冷泉院（れぜいゐん）に御子のやうに思しか

しづく四位侍従（＝薫）、そのころ十四五ばかりにて、いときびはに幼かるべきほどよりは、心おきておとなおとなしく、めやすく、人にまさりたる生ひ先しるくものしたまふを、尚侍（かむ）の君（＝玉鬘）は、婿にても見まほしく思したり。

（⑤竹河・六三頁）

Ⅸ（薫ハ）六条院（＝源氏）の御けはひ近うと思ひなすが心ことなるにやあらむ、世の中におのづからもてかしづかれたまへる人なり。……尚侍（かむ）の殿も、「げにこそめやすけれ」などのたまひて、なつかしうもの聞こえたまひなどす。「院（＝源氏）の御心ばへを思ひ出できこえて、慰む世なういみじうのみ思ほゆるを、その御形見にも誰をかは見たてまつらむ。右大臣（みぎのおとど）（＝夕霧）はことごとしき御ほどにて、ついでなき対面も難きを」などのたまひて、（薫ヲ）はらからのつらに思ひきこえたまへれば、かの君もさるべき所に思ひて参りたまふ。

（同・六四頁）

Ⅹ大臣（おとど）（＝夕霧）は、ねびまさりたまふままに、故院（＝源氏）にいとようこそおぼえたてまつりたまへれ、この君（＝薫）は、（源氏ニ）似たまへるところも見えたまはぬを、けはひのいとしめやかになまめいたるもてなしぞ、かの御若盛り思ひやらるる、かうざまにぞおはしけんかし、など、（玉鬘ハ）思ひ出できこえたまひて、うちしほたれたまふ。

（同・七〇頁）

Ⅺ（里下ガリ中ノ大君ト中ノ君ガ）こなたかなた住みたまへるけはひをかしう、おほかたのどやかに紛るることなき御ありさまどもの、簾の内心恥づかしうおぼゆれば、（薫ハ）心づかひせられて、いとどもてしづめやすきを、大上（＝玉鬘）は、（薫ヲ婿トシテ）近うも見ましかばとうち思しけり。

（同・一一〇頁）

Ⅷでは、薫が年に似合わず大人びていて人柄も好ましく将来が期待されること、そのような薫を玉鬘が「婿にても見まほしく」思ったことが語られる。Ⅸでは、亡き源氏の息子ということもあって薫の世評が高いこと、玉鬘も「げにこそめやすけれ」と思ったことなどが記される。そして、Ⅺは、大君・中の君がそれぞれ縁付いてしまった後の場面であるが、玉鬘邸で里下がり中の姉妹の存在を意識して配慮して振舞う薫を見て、玉鬘は、もはや実現不可能と分かってはいながも、「（婿トシテ）近うも見ましかば」と思ってしまうのであった。こうした玉鬘の薫への一貫して好意的なまなざし、ⅧⅪで見られた

婿としたいという玉鬘の心中からすると、やはり本心では、玉鬘は蔵人少将よりも薫を婿に望んでいたのであろうが、薫が大君への想いを内に秘めつつも、姫君たちとの結婚を願い出るようなそぶりを明確に見せなかったため、玉鬘は薫の婿取りをあきらめたのだと思われる。

薫とて明石中宮弟で東宮外戚の一人であるから、玉鬘が政治的判断から薫を取り込もうと判断してもおかしくはないのだが、しかし、注目したいのは、薫が源氏ゆかりの人物として強調されている点である。Ⅸ二重傍線部によると、世間が源氏の息子ということで薫を格別に扱い、玉鬘も薫を源氏の「御形見」として見ているといい、Ⅹ二重傍線部では、玉鬘が薫の「いとしめやかになまめいたるもてなし」を見て源氏の「御若盛り」もこうであったのだろうかと思いを馳せている。紅梅巻の匂宮同様、源氏の再来を思わせる貴公子である薫だからこそ、玉鬘が娘を任せたいと考えているような語り方が為されているのであった。ただし、薫の場合も、世間が「六条院（＝源氏）の御けはひ近うと思ひなす」から薫をもてはやす所があること（Ⅸ）、「この君（＝薫）は、（源氏ニ）似たまへるところも見えたまはぬ」のに玉鬘が思い込みによって源氏と薫を重ね合わせていること（Ⅹ）は重要である。これらの記述は、むろん、薫が源氏の実子ではないことを暗示するのであるが、薫が実際には源氏ほどの美質を持つ人物ではないことがほのめかされているのである。

致仕大臣家・髭黒家の二家の姫君たちの結婚話を描く紅梅・竹河巻は、単純に当時の貴族の婿選びの実態を反映しているだけでは決してなかった。正編の主人公源氏を理想とする物語の価値観によって、源氏の後継者と見なされる薫・匂宮を他の者よりも優位に描き、最も婿にふさわしい人物として仕立て上げているのである。その一方で、薫と匂宮でさえ源氏には遠く及ばない存在であることを示し、源氏のような超越的主人公がもはや存在しないことを嘆く文脈に収斂しつつ、源氏死後の世界で、源氏とは差別化された新たなタイプの貴公子たちによって恋物語を展開させていこうとするのであった。

四、結び

源氏物語は、正編において、唯一無二の光源氏という主人公を作り上げることに成功した。その一方で、源氏があまりに

も圧倒的な存在感を持ってしまったために、続編で彼を超えうる理想的な主人公を描くことは不可能となってしまったのである。[18] そこで、源氏とは異なるタイプの貴公子たち――誠実だが恋愛に積極的になれない薫、情熱的であるが好色で移り気な匂宮、あえて欠点を持つ不完全な二人を軸として新たな恋物語を展開させていこうとした。続編最初の三帖――匂宮・紅梅・竹河巻で光源氏の超越性を強調し、薫と匂宮を源氏の主人公性を継ぐ人物として登場させつつも、結局は源氏よりも劣る存在として描き出すのは、続編で中心となる二人を源氏と差別化するための方法であったと見られる。そうした文脈の中で、致仕大臣家・髭黒家の入内断念とその後の新たな婿選びの話が語られるのであるが、これらの出来事も、政治家としても恋愛人としても理想的であった源氏という人物の喪失を惜しみつつも、源氏と異なる新たな男君たちを印象付けるためのものとして、続編の初めに効果的に配置されているのである。

※『源氏物語』など主要な作品の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）によった。

※本稿は、JSPS科研費18K12279による研究成果の一部である。

註

（1）史上の藤原伊周女や藤原道兼女、『源氏物語』の空蟬や蜻蛉式部卿宮女など。高橋由記「「蜻蛉」巻の宮の君―式部卿宮女の出仕―」（『国語国文』二〇〇一年二月）参照。

（2）史上の源倫子など。『栄花物語』さまざまのよろこび巻参照。

（3）史上の例として、藤原道長の娘たちに遠慮した藤原公任女、藤原斉信女が挙げられる（『栄花物語』ひかげのかづら巻・もとのしづく巻）。この二人は結局、道長家の子息である藤原教通、藤原長家と結婚している。有力な皇妃の存在が障害となり、入内が見合わされたが、次善の策として、天皇の外戚たる摂関家の子息との縁組が望まれたのである。

（4）『大和物語』一〇五段の平中興女、一五五段の大納言女、『源氏物語』の玉鬘など。

(5) 伴瀬明美「院政期における後宮の変化とその意義」(『日本史研究』一九九六年二月)、服藤早苗「王権と国母—王朝国家の政治と性」(『平安王朝社会のジェンダー—家・王権・性愛』、校倉書房、二〇〇五年)。

(6) 二の宮も妻に夕霧中の君を迎えている(⑤匂宮・一八頁)。皇子の結婚に関与する明石中宮については、島田とよ子「明石中宮—光源氏崩後—」(『大谷女子大国文』一九八五年三月)、土居奈生子「源氏物語〈大宮〉考—明石中宮の場合—」(『国学院雑誌』二〇〇五年五月)、中井賢一「明石中宮論—明石中宮の機能と権力機構としての宇治—」(『物語展開と人物造型の論理』、新典社、二〇一七年)、湯淺幸代「『源氏物語』の立后と皇位継承—宇治十帖の世界へ—」(『源氏物語の史的意識と方法』、新典社、二〇一八年)参照。

(7) 史上の醍醐朝では、天皇の実母藤原胤子は既に亡く、養母の藤原温子も延喜五年(九〇五)に出家したため、東宮保明親王・寛明親王の母である中宮藤原穏子とその兄弟が天皇への影響力を強めた。穏子は、女御時代ではあるが、保明親王の妃選びに関わっている(角田文衛「太皇太后穏子」(『紫式部とその時代』、角川書店、一九六六年))。村上朝でも、天暦八年(九五四)の母后穏子の死後は、東宮憲平親王母の中宮藤原安子と兄弟たちが天皇の治世を支えていた。穏子や安子が明石中宮と類似することについては、島田注6論文参照。

(8) 島田とよ子「式部卿の宮の不幸—親王と政権—」(『大谷女子大国文』一九八四年三月)、田坂憲二「髭黒一族と式部卿宮家—源氏物語における〈政治の季節〉・その二—」(『源氏物語の人物と構想』、和泉書院、一九九三年、初出は『源氏物語の探究』、風間書房、一九九〇年)、日向一雅「桐壺帝と大臣家の物語—準拠と話型構造論の観点から—」(『源氏物語の準拠と話型』、至文堂、一九九九年)、高橋麻織「冷泉帝の元服—摂政設置と后妃入内から—」(『源氏物語の政治学』、笠間書院、二〇一六年)など。

(9) 今井源衛「兵部卿宮のこと」(『源氏物語の研究』、未来社、一九六二年)、村井順「「澪標」の巻」(『源氏物語　上』、中部日本教育文化会、一九六二年)。

(10) 田坂憲二「内大臣光源氏をめぐって—源氏物語における〈政治の季節〉・その三—」(田坂注8書所収)、塚原明弘「冷泉政権論—光源氏の摂政辞退と夕霧の大学入学—」(『源氏物語ことばの連環』、おうふう、二〇〇四年)など。

(11) この理念については、室田知香「光源氏の後宮理念—若菜上巻冒頭の皇女降嫁論に関連して—」(『国語国文』二〇〇八年十一月)に詳しい。

(12) 陣野英則「「光源氏の物語」としての「匂宮三帖」—「光隠れたまひにしのち」の世界—」(『源氏物語の話声と表現世界』、勉誠出版、二〇〇四年、初出は『学術研究—国語・国文学編—』一九九九年二月)、神田龍身「光源氏時代への挽歌—匂宮三帖論」

（『源氏物語＝性の迷宮へ』、講談社、二〇〇一年）など。

(13) このような夕霧と類似するものとして、正編で、娘の弘徽殿女御が斎宮女御よりも寵愛されることを望む余り、帝の好む絵を娘のもとに収集させ、しかもそれを帝が斎宮女御の所に持ち出すのを許さなかった権中納言（内大臣）の利己的な姿が想起される。

(14) 注3参照。后腹の親王としては、例えば村上天皇皇子の為平親王（母は中宮安子）の結婚について、『栄花物語』に「御女持たまへる上達部は、（為平親王ヲ娘ノ婿ニト）いみじう気色ばみきこえたまふに……」（①月の宴・三六頁）とあったのが参考になる。

(15) 匂宮は、宇治十帖の総角巻で、突如次期東宮候補として扱われ始めるが、匂宮と夕霧六の君の結婚話を進展させ宇治大君の苦悩と死を招くために、物語が彼を据え直したことを、青島麻子「宿木巻の婚姻と「ただ人」―身分の捉え直しをめぐって―」（『源氏物語　虚構の婚姻』、武蔵野書院、二〇一五年）が論じている。匂宮三帖の時点では、匂宮兄の二の宮の方が有力な東宮候補として描かれていると考えられる。

(16) 注3参照。

(17) 平林優子「竹河巻における玉鬘と冷泉院」（『源氏物語女性論』、笠間書院、二〇〇九年）も同様の見解を示す。

(18) 大朝雄二「匂宮論のための覚え書き」（『源氏物語の探究』第二輯、風間書房、一九七六年）・「匂宮三帖論」（『源氏物語続篇の研究』、桜楓社、一九九一年、初出は『野田教授退官記念日本文学新見』、笠間書院、一九七六年）、鷲山茂雄「匂宮・紅梅・竹河三帖論―その方法を中心として―」（『国文学研究』一九七六年六月）など。